

# キャラ語尾「ござる」の文法：分析編

小林 亜希子

## 7. キャラ語尾「ござる」用法の記述的一般化と疑問

マンガではよく登場人物がみずからのキャラ（属性・性格・風貌など）を表すキャラ語尾を用いて話す。本論文は、『忍者ハットリくん』（藤子不二雄<sup>①</sup>作）の主人公ハットリくんが用いる「ござる」を例にあげ、キャラ語尾の統語論研究の可能性を追究するものである。本稿は、本論文の前編である「キャラ語尾「ござる」の文法：記述編」の続きであり、セクション番号や例文等の通し番号も「記述編」からの続きとなっている。

「記述編」で、キャラ語尾「ござる」について次のことを明らかにした。

A. 「ござる」の出現位置について：ハットリくんの「ござる」はいくつかの統語位置に現れる。まず、動詞（V）やイ形容詞（A）を述語とする文の「ござる」は過去の助動詞と終助詞の間に現れ、活用しない。本来の「ござる」はこの位置に現れないため、これを新用法の「ござる」とよぶ。

### (50) 新用法の「ござる」

	V/A	否定	過去	ござる <sub>活用なし</sub>	終助詞	
a.	打た	なかつ	た	でござる	な	『旧』
b.	息ぐるしく	なかつ	た	でござる	か	『新』

一方で、本来の「ござる」と同じ用法もみられる。これを旧用法の「ござる」とよぶ。その1つが存在動詞「ござる」である。これは動詞であるから否定や過去の助動詞に先行し、活用する。

## (51) 旧用法の「ござる」①:存在動詞の「ござる」

	ござる <sub>活用あり</sub>	否定	過去	終助詞	
a. ころあたりは	ござら	ぬ		か?	『新』
b. トレーニングの機械を かっできたことが	ござっ		た	な	『新』

もう1つが、体言や指示副詞を述語とする、いわゆるコンピュータ文に現れる「ござる」である。基本的に、「ござる」はコンピュータ位置に現れて活用する。

## (52) 旧用法の「ござる」②:コンピュータ文の「ござる」

体言	ござる <sub>活用あり</sub>	否定	過去	終助詞	
a. いねむり	ではござら	ん			『新』
b. あぶないとこ	でござっ		た		『旧』

しかし、否定辞「ない」が使われるときにかぎり、助動詞と終助詞の間に現れる。

## (53) 否定辞「ない」があるコンピュータ文の「ござる」

体言	コンピュータ	否定	過去	ござる <sub>活用なし</sub>	終助詞	
a. まんが家	じゃ	ない		でござる	よ	『旧』
b. 見たん	じゃ	ない		でござる	か	『新』

これは(50)と同じ位置だと思われる。

**B. 「ござる」の意味・機能について：**ハットリくんのマンガは1960年代と1980年代の2回にわたって雑誌に連載された。前者を『旧』、後者を『新』とよび、『旧』と『新』で「ござる」の意味や機能に違いがないかを調べた。調査の結果、「ござる」の意味・機能は(54a)のように変化していることがわかった。また、ハットリくんの発話自体も(54b)のように変化していた。

(54) (=48)	『旧』	『新』
a.	ござる <sub>[+丁寧]</sub>	ござる <sub>[-丁寧]</sub>
b.	モダリティの使い分けあり	モダリティの使い分けなし

『旧』の「ござる」は丁寧さすなわち聞き手への敬意を表す。目下の相手や敵に「ござる」を使うことはない。しかし『新』では「ござる」がどんな相手にも使われており、丁寧の意味が消えている。

また、『旧』のハットリくんは命令・勧誘・意志といったモダリティを明示して話すことがあり、そのときは「ござる」を使わないのに対して、『新』のハットリくんの発話では文末が「～でござる」ばかりになってモダリティの使い分けがほぼなくなる。つまり、彼の発話のモダリティは聞き手（読み手）が文脈から判断せねばならなくなる。この点で『新』のハットリくんの発話はピジン化している。

AとBの観察から、次の疑問がもちあがってくる。

(55) (=49)

- 新用法の「ござる」の統語的ステータスは何か？
- 新用法の「ござる」の使用がコンピュータ文で制約されるのはなぜか？
- ハットリくんの発話が『新』になってピジン化したのはなぜか？

以下、これらの疑問に答える分析を提出する。最初に（55a）の疑問を扱い、新用法「ござる」はモーダル位置を占めることを示す（8節）。つぎに（55c）を扱い、『新』の「ござる」が丁寧の意味を失ったこととハットリくんの発話のピジン化にどのような関係があるのかを論じる（9節）。最後に10節で（55b）について考え、制約を統語派生の経済性に還元する。11節で論をまとめる。

## 8. 新用法の「ござる」の統語的ステータス

新用法の「ござる」は、(50) のとおり過去の助動詞と終助詞の間に現れて活用しない。現代日本語でこの位置に現れるものとして、推量の「だろう」と

「でしょう」, およびイ形容詞文の「です」がある。それぞれの例を (56) と (57) に示す。(57) の「です」にはやや口語的な響きがあるものの, 書きことばでも使用可能である (日本語記述文法研究会 (2007))。

(56)	A/V	否定	過去	だろう/でしょう	終助詞
a.	暑い/食べる			だろう	ね
b.	暑かつ/食べ		た	だろう	ね
c.	暑く/食べ	ない		でしょう	ね
d.	暑く/食べ	なかつ	た	でしょう	ね

(57)	A	否定	過去	です	終助詞
a.	暑い			です	ね
b.	暑かつ		た	です	ね
c.	暑く	ない		です	ね
d.	暑く	なかつ	た	です	ね

「だろう」は推量のモーダルであり, 「でしょう」は丁寧な推量のモーダルである。奥津 (1978) や影山 (2021) によると, (57) の「です」は「丁寧な断定」のモーダルである。断定のモーダルはふつうゼロ形であるが (仁田 (1999); 日本語記述文法研究会 (2003); 上田 (2007)), 「丁寧」の情報を表すため音形をもつ。

否定・過去と終助詞の間に現れる要素としてはほかにも, 「らしい」「ようだ」「そうだ」「って」「かもしれない」「にちがいない」などがある。いずれも推量や伝聞のモダリティ要素である<sup>1</sup>。

つまり過去の助動詞と終助詞の間はモーダルの位置である。このことから, 新用法の「ござる」はモーダルの位置を占めると考えられる。

<sup>1</sup> ただし, これらのうちのいくつかは過去形になれる (「食べたらしかった」, 「食べたにちがいなかった」) など, 真正のモーダルらしくない特徴をもつため, 国語学・日本語学では「疑似モーダル」とよばれる (上田 (2007))。

## 9. キャラ語尾とピジンの発話の関係

つぎに、キャラ語尾とピジンの発話の関係について考える。「記述編」で、『新』のハットリくんがモダリティを明示せずに話すようになったことを観察した。

(58) (=44)

『旧』	『新』
命令 「してください」	「してください」
「しろ」	「するでござる(か)」
疑問 「するでござるか」「するか」	
意志・勧誘 「するでござる」「しよう」「するぞ」	
述べ立て 「するでござる」	

本節では、ピジン化は「ござる」が純粋なキャラ語尾になったことに原因があると主張する。なお、命令・禁止、意志・勧誘といったモダリティは動詞文にのみかかわるものであるから、ここでは動詞文の「ござる」、つまり新用法の「ござる」についてのみ考える。

「ござる」はどんな意味・機能をもつのだろうか。前節より、動詞文の「ござる」はモーダルの位置にあることがわかった。しかし、(58)をみると「ござる」はあらゆるモダリティの文に現れているので、これというモダリティはないようである。また、「記述編」でみたとおり、『旧』の「ござる」には丁寧の意味があるが『新』の「ござる」からはその意味が消えている。残るのは、「私は忍者」という話し手のキャラ表示機能だけである。つまり、『新』の「ござる」は純粋なキャラ語尾になったといえる。

以上の観察をまとめるとこうなる。

(59) 『新』における新用法「ござる」

- a. モーダルの位置を占める
- b. 話し手のキャラ(「私は忍者」)のみを表示する

本稿はこの2つの要因がハットリくんの発話をピジン的にしたと主張する。その因果関係は次のとおりである。まず、「ござる」が純粹なキャラ語尾になったことでその使用圧力が増す。『旧』の「ござる」は待遇表現であるから必要がなければ使わなくてよい。しかし、『新』の「ござる」は話し手のキャラを表すだけの要素になる。すると、ハットリくんが誰に何を話すときにも「私は忍者」が当てはまるため、ハットリくんはすべての発話に「ござる」を使わねばならなくなる。

しかし、日本語のモーダルは相互排他的である。(60)は仁田(1999)や上田(2007)が真正モーダルとよぶものであるが、(61)のとおりこれらを2つ以上いっしょに使うことはできない。

(60) 真正モーダル

- a. 認識のモダリティ:  $\emptyset$ (断定), だろう(推量), まい(否定推量), (しよう(意志))
- b. 発話伝達のモダリティ: (しろ(命令), (する)な(禁止), (しよう(誘いかけ))

- (61) a. \*食べるだろう<sub>推量</sub> + しろ<sub>命令</sub>, \*食べるまい<sub>否定推量</sub> + よう<sub>誘い/かけ</sub>  
 b. \*食べるだろう<sub>推量</sub> + よう<sub>意志</sub>, \*食べよう<sub>意志</sub> + だろう<sub>推量</sub>  
 c. \*食べろ<sub>命令</sub> + だろう<sub>推量</sub>, \*食べよう<sub>誘い/かけ</sub> + まい<sub>否定推量</sub>

真正モーダルが相互排他的であることを上田(2007)やSaito(2015)は統語的に説明する。彼らの議論を簡単にまとめると次のようになる。まず、(60a)の認識タイプのモーダルと(60b)の発話伝達タイプのモーダルは、それぞれ特定の統語位置に現れる。この位置には1つのモーダルしか入れないため、認識タイプのモーダルを2つ使うことや発話伝達タイプのモーダルを2つ使うことはできない。また、統語的な制約によって認識のモーダルを使うと発話伝達のモーダルの使用ができなくなり、発話伝達のモーダルを使うと認識のモーダ

ルが使用できなくなる<sup>2</sup>。よって、これら2タイプのモーダルをいっしょに使うこともできない。ゆえに真正モーダルは1つの文につき1つしか使えない。これが正しいとすると、ハットリくんの発話のピジン化が帰結する。すなわち、(i)『新』の「ござる」が純粋なキャラ語尾になったためにハットリくんはどんな発話にも「ござる」を使うようになったけれども、(ii)「ござる」がモーダル位置を占めるのでほかのモーダルが使えなくなる。こうして『新』のハットリくんはモダリティの使い分けをしない、ピジンの話し方をするようになったのである。

「記述編」の2節でみたように、キャラ語尾の使い手の発話がピジンのになりやすいことについて、先行研究は文体論的・社会言語学的な説明を与えている。しかし本稿の議論が正しいければ、キャラ語尾とピジンの発話の間には統語的な因果関係もあることになる。

## 10. 「ござる」の統語論

新用法の「ござる」はモーダル位置を占める。モーダル「ござる」はコンピュータ文にも現れるが、否定辞「ない」があるときにかざられる。それ以外ではコンピュータの「ござる」が現れる。

本節ではモーダル「ござる」のこの使用制限が統語計算の経済性に還元できると論じる。まず10.1節でこれとよく似た使用制限がモーダル「です」にもみられることを指摘する。10.2節でMiyagawa (2022) による「ます」の分析を簡単に紹介する。10.3節では、モーダル「です」の使用制限も説明できるようにMiyagawa分析の修正分析を提案する。そして10.4節でコンピュータ「ござる」とモーダル「ござる」の使い分けを説明する。

### 10.1 モーダル「です」の使用制限

丁寧な断定のモーダル「です」は、(57) のとおりイ形容詞には問題なく後接する。しかしコンピュータ文や動詞文での使用には制限がある（日本語記述文法研究会 (2007); Yamada (2023)）。否定辞「ない」がある文では、次のとおりモーダル「です」が使用できる。

---

<sup>2</sup> 上田 (2007) は、一方の統語位置が使用されると他方の使用ができなくなるという制約を提案している。一方 Saito (2015) は、モーダル要素の c-selection (範疇選択) 特性によりこれら2タイプのモーダルが共起不可能になると提案する。

(62)	N	コピュラ	否定	過去	です	終助詞
a.	忍者	で(は)	ない		です	ね
b.	忍者	で(は)	なかつ	た	です	ね

(63)	V	否定	過去	です	終助詞
a.	食べ	ない		です	ね
b.	食べ	なかつ	た	です	ね

しかし、これ以外の環境でモーダル「です」を使うことはむずかしい。肯定のコピュラ文においては、(64a, b) のようにコピュラ「です」で丁寧さを表すのがふつうである。

(64)	N	です <sub>コピュラ</sub>	否定	過去	終助詞
a.	忍者	です			ね
b.	忍者	でし		た	ね

次のようにモーダル「です」を用いることもできなくはないが「非常にまれ」（日本語記述文法研究会（編）（2003: 235））であり、非標準的ないし変なしゃべりかたをしているという印象を抱かせる。

(65)	N	コピュラ	否定	過去	です	終助詞
??	忍者	だつ		た	です	ね

そして肯定の動詞文では、(66a, b) のように補助動詞「ます」で丁寧さを表すのがふつうである。否定辞「ん」を用いた否定文でも (66c, d) のとおり「ます」が現れる。



(66)	V	ます <sub>補助動詞</sub>	否定	過去	終助詞
a.	食べ	ます			ね
b.	食べ	まし		た	ね
c.	食べ	ませ	ん		ね
d.	食べ	ませ	ん	でした	ね

((66d) に現れる「です」については10.2節で説明する。)

こういった環境でモーダル「です」を用いて (67) のような言い方をすることはまったくないわけではないが、やはり非標準的な響きがある（「記述編」の (4c) およびその説明を参照されたい）。

(67)	V	否定	過去	です	終助詞
a.	?? 食べる			です	ね
b.	?? 食べ		た	です	ね
c.	?? 食べ	ん		です	ね

コピュラ文と動詞文、およびイ形容詞文における丁寧の表し方をまとめると次のようになる。

(68)	無標	否定辞「ない」があるとき
a. コピュラ文:	コピュラ「です」	モーダル「です」
b. 動詞文:	補助動詞「ます」	モーダル「です」
c. イ形容詞文:	モーダル「です」	モーダル「です」

コピュラ文および動詞文では丁寧をマークする位置が2つある。基本的にはより述語に近い位置が使われる。しかし否定辞「ない」があるときはモーダル「です」が使われる。一方、イ形容詞文で丁寧をマークできるのはモーダル「です」のみで、否定辞「ない」のあるなしに関係なく使用できる。

これと、ハットリくんの「ござる」の用法を比べてみよう。

(69)	無標	否定辞「ない」があるとき
a. コピュラ文:	コピュラ「ござる」	モーダル「ござる」
b. 動詞文, イ形容詞文:	モーダル「ござる」	モーダル「ござる」

ハットリくん語でもコピュラ文では丁寧をマークする位置が2つある。基本的にはコピュラ「ござる」が使われる。しかし否定辞「ない」があるときはモーダル「ござる」が使われる。一方、動詞文とイ形容詞文で丁寧をマークできるのはモーダル「ござる」のみである（ハットリくんのレジスターには「ます」がない）。よって否定辞「ない」のあるなしに関係なくモーダル「ござる」が使用できる。

(68) と (69) のどちらも次の規則に従っていることがわかる。

- (70) a. 丁寧の位置が複数あるときは、述語に近い位置を使う。  
b. ただし、否定辞「ない」があるときは述語から遠い位置を使う。

これはけっして日本語母語話者にとって自明の規則ではない。にもかかわらず、創作されたキャラ語尾「ござる」にも規則があることは注目に値する。キャラ語尾の使用にも日本語母語話者の言語直感が反映されていることを示す事実といえるだろう。(70)の規則がなぜあるのか、以下の節で考えていく。

## 10.2 「ます」の統語論：Miyagawa (2022)

丁寧表現の使用規則(70)について考える前に、この節では補助動詞「ます」の特徴を生成文法の枠組みで説明したMiyagawa (2022)の分析を簡単に紹介する。これに修正を加えた分析を10.3節で提案し、(70a, b)を説明する。

「ます」には変わった統語的特徴がある。「ます」は補助動詞であり動詞に近い位置に現れるのだが、南(1974)のいうA類およびB類従属節に現れることができない(上田(2007))。

## (71) A 類従属節

- a. \*[食べますながら] テレビを見ます
- b. 補助動詞 OK: [食べ続けながら], [食べさせながら]
- c. モーダル, 終助詞×: \*[食べるだろうながら], \*[食べるよながら]

## (72) B 類従属節

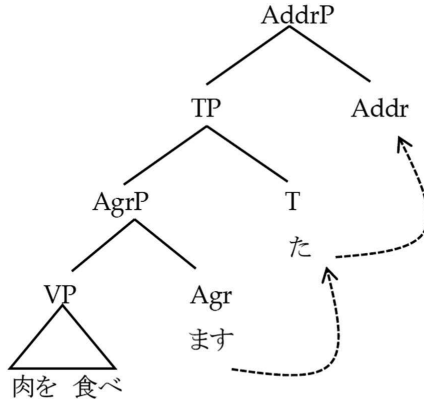
- a. ??[たくさん食べましたので] 太りました
- b. 補助動詞 OK: [食べ続けたので], [食べさせたので]
- c. モーダル, 終助詞×: ??[食べるだろうので], \*[食べるよので]

(71b, c) や (72b, c) が示すとおり, A類およびB類従属節は補助動詞を含むことはできるがモーダルや終助詞を含むことはできない。これをふまえて (71a) と (72a) をみても、「ます」は補助動詞であるにもかかわらずA類およびB類従属節に現れないことがわかる。この事実は、「ます」は補助動詞だが周縁の統語位置にもかかわりがあることを示唆する。

丁寧表現が文の周縁部にかかわると考えることは通言語的にも妥当である。多くの言語において、発話参加者（話し手と聞き手）や発話態度をマークする語句は文の周縁部に現れる (Yamada (2019) ; Miyagawa (2022))。文の周縁部に発話態度にかかわる普遍的な階層があるのだとしたら、聞き手への敬意（またはわきまえ）を表す「ます」も文の周縁部にかかわりをもつはずである。

「ます」が複数の統語位置にかかわることを、Miyagawa (2022) は「ます」の統語移動によって説明する。Miyagawaの分析は以下のとおりである。

- (73) 「ます」は Agr 主要部に生起し, 非顕在的移動(covert movement)により文周縁部に移動する。



(Agr(eement)=一致; T(ense)=時制; Addr(essee)=聞き手)

聞き手のタイプを動詞の一致形で表す言語（バスク語など）があることから、「ます」もまず一致操作が起こる位置（Agr）に生起すると考える。「ます」はそこから循環的に聞き手位置へと非顕在的に移動する。非顕在的移動の正確なメカニズムをMiyagawaはとくに論じていないが、ここではもっともシンプルな考え方—「統語体が動くが何らかの理由で移動結果が音声に出力されない」—をしておく（cf. Johnson (2012)）。

(73) では「ます」や「た」といった音形をもつ語彙要素が最初から統語部門に現れるように示しているが、これは便宜的な表示である。最近の生成文法では、完成した統語構造が音韻部門に送られて音声変換されるときに（それぞれの言語の発音規則に従って）語彙要素の出力形が決められると考えるのが一般的である（cf. Halle and Marantz (1993)）。「ます」がある文では否定辞や過去の助動詞が特殊な形になるが、これは「ます」移動の影響であると考えられる。次をみてみよう。

(74)	V	Agr	Neg	T	Addr
a.	食べ	ます	ない	∅ <sub>現在</sub>	(ます)
			(→ん)		
b.	食べ	ます	ない	た <sub>過去</sub>	(ます)
			(→ん)	(→でした)	

現代標準日本語では、否定 (Neg) はふつう「ない」と発音される。しかし、「ます」と共起すると (74a) のとおり否定は「ん」となる (「食べません」)。「ます」移動の経由点となったNegは有標形で出力せよという規則があると思われる。また、過去の時制辞 (T) はふつう「た」と発音される。しかし、「ません」の後ろでは (74b) のとおり「でした」となる。「でした」はこれ以外の環境では許されない (「\*食べるでした」「\*食べないでした」「\*食べますでした」)。「ます」がNegを経由してTに入ってきた場合はTを「でした」という形で出力せよという規則があると思われる<sup>3</sup>。

まとめると、「ます」のふるまいをMiyagawa (2022) は「ます」の非顕在的移動によって説明する。「ます」は補助動詞の位置に生起しそこで発音されるものの、文周縁の階層に移動する必要がある。よってその階層を欠くA類・B類従属節には現れない。また、「ます」移動は経由点となる語彙要素の出力形に影響を与えるため、「ます」の後ろの否定は「ん」となり、「ません」の後ろの過去は「でした」となる。

<sup>3</sup> より正確には、「ます」移動が影響するのはTではなくダミーコピュラの出力形である (cf. Yamada (2019, 2023))。 (i) が示すように、否定と過去の助動詞が連続するときは形態的理由からダミーコピュラ「ある (ar)」が挿入される。しかし「ます」があるときは「ある」でなく「です (des)」が挿入される。

	V	ます	否定		過去	
(i)	tabe		nak	ar	ta	(> tabe-nak-at-ta)
(ii)	tabe	mas	n	des	ta	(> tabe-mase-n-desi-ta)

明治初期には「食べません-だつ-た」のような形もあったが衰退した (田中 (1998))。「ます」が移動するときはダミーコピュラも丁寧形にすることが好まれるようになったのであろう。

### 10.3 「ます」と「です」の使い分け

本稿は、丁寧の助動詞が文周縁部に非顕在的に移動するというMiyagawaの基本的なアイデアは採用する。しかし、Miyagawaはモーダルやコピュラの「です」をどう分析するかには触れていないため、これらの分析は別につくらねばならない。また、10.1節の(68)にある「です」と「ます」の使い分けをどう説明するかも改めて考えねばならない。この節では、Miyagawa分析に大幅な修正を加えてこれらの事実も扱えるようにする。

第一の修正として、否定辞「ん」は「ない」の有標形ではなく異なる語彙素であるとする。次の例をみてみよう。「ます」のない文であるが否定辞「ん」が現れている。(西日本方言では否定辞「ん」の使用が無標であるが、これらの例の話し手は西日本方言話者ではない。)

- (75) ああっ ちよろちよろしないで もうっ／よん ごう ろく しち… はち…  
あ〜 わからん (『ちびまる子ちゃん』)
- (76) 俺とおまえの推測だけで、ヤツらは動いてくれんよ  
(『小鳥を愛した容疑者』)
- (77) 納得がいかんね。しかしーああいやだ。僕はなぜこんな声で、こんな言葉をしやべっているのだろう。  
(『椿山課長の七日間』)

これらの例から、「ん」は「ない」の異形態ではなくもう一つの否定助動詞として辞書に登録されていると考える。ただし、標準日本語では「ない」を使用するのが無標のオプションである。

第二の修正として、「ます」はAddrだけでなくModとも関係すると考える。次の例の文法性の差がそう考える根拠となる。

- (78) a. \*私はあす、仕事を休むØ。  
b. 私はあす、仕事を休みます。

(日本語記述文法研究会(2003:56)改変)

(78a) のとおり、非過去形の動詞の言い切り形は1人称主語とは共起しにく

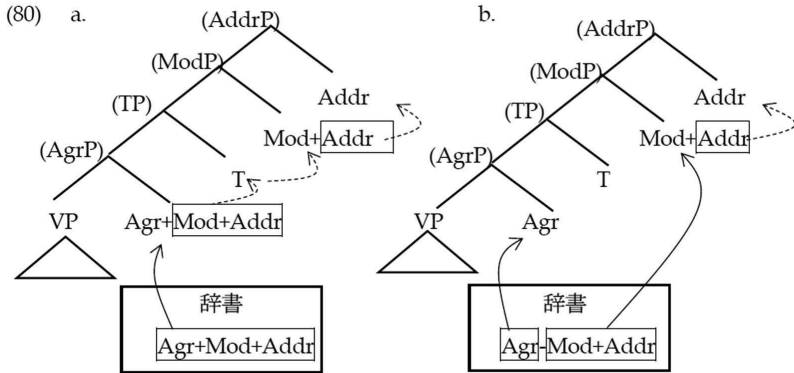
く、「休もう」「休むつもりだ」「休むよ」などのモダリティ表現が何かしら必要になる。(78b)のように「ます」をつけることでも適格になるため、「ます」は何かしらのモダリティ表現でもありと考えられるのである。

第三に、補助動詞の「ます」とモーダルの「です」は同じ語彙要素の異なる出力形であるとする。具体的には、標準日本語の辞書には「ます／です」が次の形で登録されていると考える。

### (79) Agr+Mod+Addr

「ます／です」は3つの範疇の複合体である。Miyagawaは「ます」をAgrからAddrへと移動させるためにAddrに何らかの誘引素性があると想定するが、(79)を採用すればそのような想定は不要である。Agr+Mod+AddrはまずAgrとしての選択特性を満たすためにVPと外的併合する。つぎに、Modとしての選択特性を満たすため、複合体のうちMod+Addrの部分をコピーしてTPと併合する(内的併合)。最後に、Addrとしての選択特性を満たすためAddrをコピーしてModPと併合する(内的併合)。この派生を図示したものが(80a)である。実線が外的併合、点線が内的併合を表している。内的併合とは移動であるから、途中の主要部であるTを経由して移動する(主要部移動制約(Head Movement Constraint))<sup>4</sup>。この移動は非顕在的であるのでAgr+Mod+AddrはAgr位置でのみ音形を与えられる。

<sup>4</sup> より正確には、Tへの編入(incorporation)と脱編入(excorporation)をしながら移動する(cf. Roberts (1991))。



(80a) ではAgr+Mod+Addrが1まとまりで統語部門に導入されているが、この要素はAgrとMod+Addrに分割して導入することもできると考えてみよう。(80b) はその場合の派生を示している。AgrはVPと外的併合し、これ以上動くことはない。一方、Mod+AddrはまずTPと外的併合し、その後AddrがコピーされてModPと内的併合する。この内的併合(移動)も非顕在的である。よってこの場合はAgr位置のAgrとMod位置のMod+Addrが音形出力の対象となる。音韻部門では次の出力規則があると考ええる。

### (81) 語彙出力規則

- a. Agr+Mod+Addr → *mas*
- b. Agr → ∅
- c. Mod+Addr → *des*

(80a) の構造が音韻部門に送られると、(81a) が適用されて「食べ-masiAgr+Mod+Addr-た」ができる(活用語尾1は(81)適用のあとで別の規則によって挿入されると考える)。一方、(80b) の構造が音韻部門に送られると(81b, c) が適用されて「食べ-∅Agr-た-desuMod+Addr」ができる。こうして、同じ語彙要素(79) から補助動詞「ます」とモーダル「です」が出力される。

しかし、否定辞「ない」のない動詞文ではモーダル「です」が出てこないの



で (80b) の派生はブロックせねばならない。これはChomsky (2021) の経済性の考えを採用することで達成できる。Chomskyは (82) のとおり、外的併合 (External Merge, EM) よりも内的併合 (Internal Merge, IM) のほうが経済的であると述べる。

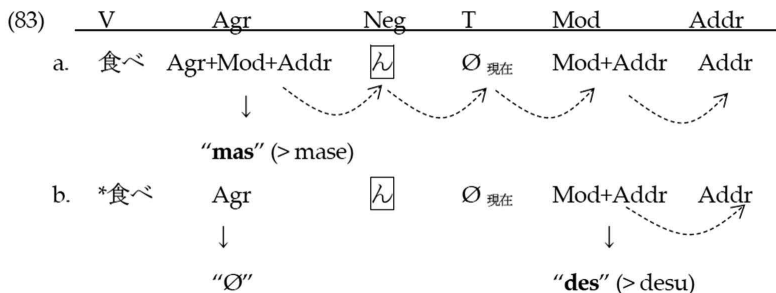
(82) ... IM and EM, the former much more economical because of the same condition of restriction on search. (Chomsky (2021: 20))

外的併合は何万ものエンタリーをもつ辞書の中から候補を探さねばならないが、内的併合はすでにつくった統語体の中から候補を探せばよいため操作のコストが低い。よってChomskyは (それまでの主張を大きく変えて) 必要がないかぎり内的併合のオプションのほうが優先されるとする。

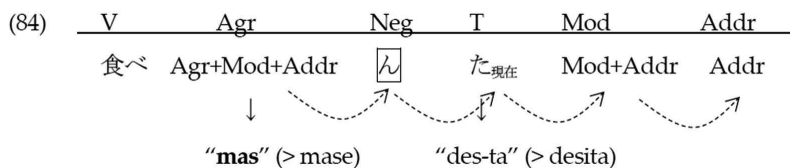
これをふまえて、(80a) と (80b) の派生をみてみよう。これらは同じ語彙要素を使った派生であるから経済性のコストを比べられる。Modの投射 (ModP) が (80a) では内的併合でつくられているが (80b) では外的併合でつくられているから、前者のほうがコストが小さい。ゆえに (80a) の派生オプションが選ばれて「食べました」ができる。よりコストの高い (80b) の派生オプションをとって「食べるです」をつくることはできない<sup>5</sup>。

否定文で、否定辞「ん」がAgrとTの間にあるときも同様である。Agr+Mod+Addrを1まとまりにして統語部門に導入する派生 (83a) のほうが、AgrとMod+Addrに分けて導入する派生 (83b) よりも経済的である。

<sup>5</sup> Chomsky (1995) は1つの派生のそれぞれの段階でとりうるより経済的な操作がそうでない操作に優先するという局所的経済性の考えを導入した。本稿の提案は、1つの文構造をつくるときにとりうる2つの可能な派生を比較してより経済的な派生を選ぶというもので、よりグローバルな経済性になってしまう。ただし、局所的な経済性を可能にする道具立て (Numeration や Lexical Array) にも問題がある (cf. Collins (1997))。経済性の定式化は今後の課題である。



よって、否定辞「ん」が現れる文でも「ます」を用いた「食べません」ができる。なお、(83a)のTが過去のときは「食べませんでした」となり、「ます」のほかにも「です」が現れる。これについてはMiyagawa (2022)の分析に従って、「ます」移動の影響を受けて出力形が変わったものとする（注3も参照のこと）。



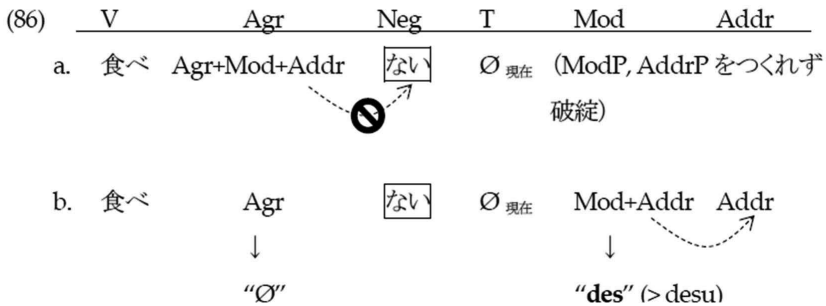
今度は否定辞「ない」があるときの派生を考えよう。この環境では(80b)の派生オプションが選ばれモーダル「です」が出現する。これを保証するために次に提案する<sup>6</sup>。

<sup>6</sup> 縄田裕幸先生 (p.c.) から別の説明の可能性を指摘していただいた。「ます」の否定形「ません」が1語つまり Agr+Neg+Mod+Addr という複合体として辞書に登録されていると考えてみよう。これは Neg でもあるから Neg を経由して Addr まで移動できることになる。一方「ない」は単独の Neg であり Agr+Mod+Addr の移動をブロックする。このように考えれば2つの否定辞がどうして移動の障壁になったりならなかったりするのかが説明できるようになる。この可能性の検討は今後の課題としたい。

(85) 否定辞「ない」は主要部移動をブロックする。

(85) は現在のところアドホックな規定である。「ない」は形態的に形容詞であるため（助）動詞要素の移動をブロックするのかもしれない。

Agr+Mod+Addrを1まとまりにしてAgrに導入すると、(86a) のとおり否定辞「ない」がMod+Addrの移動を阻止するため派生が破綻する。(86b) のように複合体をAgrとMod+Addrに分割して統語計算に導入する派生にするとNegを越える移動がないため収束する。したがってこの場合は(86b) の分割オプションを使うことができる。



結果として、否定辞「ない」があるときはモーダル「です」が現れて「食べないです」とか「食べなかったです」という文ができる。

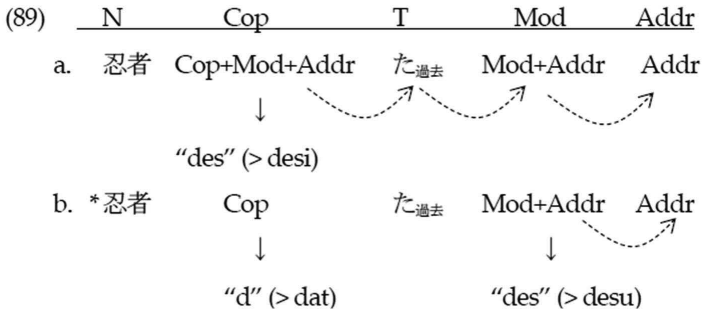
コンピュータ文におけるコンピュータ「です」とモーダル「です」の使い分けも同じように説明できる。これらは同じ語彙要素であり、(87) のとおり3つの範疇からなる複合体だと考えよう。(これにAgrを加えてもよいが、議論の大筋に影響がないので省略する。)

### (87) Cop + Mod + Addr

これは1まとまりで統語計算に導入してもよいし、CopとMod+Addrに分割して導入してもよい。音声部門での出力は次のとおりとする。

- (88) a. Cop+Mod+Addr → *des*  
 b. Cop → *d*  
 c. Mod+Addr → *des*

(87) の複合体を 1 まとまりで統語計算に導入した場合の派生を (89a) に、CopとMod+Addrに分割してから導入した場合の派生を (89b) に示す<sup>7</sup>。



(89a) では破線の矢印のとおり非顕在的移動が起こり、Cop位置の要素が発音の対象となる。(88a) が適用されて*des*が出力され、「忍者でした」ができる。一方(89b)ではCopがCop位置に、そしてMod+AddrがMod位置にそれぞれ的外的併合され、破線の矢印のとおり非顕在的移動が起こる。CopとMod位置の要素が発音の対象であるから、(88b, c) が適用されて「忍者-だっ-た-です」ができる。

しかし、実際には(89b)の派生オプションをとることはできない。すでに述べたとおり、語彙要素を分割せずに統語計算に導入するほうが派生のコストは小さい。よって、(89a)の派生オプションをとることが優先されるのである。ただし、否定辞「ない」を含む文をつくる時はCop+Mod+Addrを分割せねば

<sup>7</sup> (89b) の“d” (>dat)については注3参照。より正確には、dと「た」の間にダミーコピーラ ar が挿入されて d-ar-ta > dat-ta となる。なお、本動詞の「ある(ar)」もある(Nishiyama (1999))。これは動詞であるから丁寧体の文では「ます」が使用される(「忍者であります」)。ダミー ar と本動詞 arの違いについてはYamada (2023)を参照されたい。

収束する派生ができない。CopとMod+Addrに分割すると、次のとおりNeg「ない」を越える移動をしなくてもすむため派生が収束する。

(90)	N	Cop	Neg	T	Mod	Addr
	忍者	Cop	なかつ	た <sub>過去</sub>	Mod+Addr	Addr
		↓			↓	↗
		“d” (> de)			“des” (> desu)	

こうして、コンピュータ文でも否定辞「ない」があるときにかぎってはモーダル「です」が現れて「忍者で（は）なかつたです」という文ができる。

なお、イ形容詞文ではモーダル「です」のみが現れる。「イ形容詞+です」文を派生する方法はいくつか考えられるが、ここでは次のように考えておく。Baker (2003) によると日本語の形容詞はAPとPredPの2層からなり、形容詞の項はPredPに生起する。ここで、AgrPはAPとPredPの間にあると考えてみよう<sup>8</sup>。

(91) [<sub>PredP</sub> 花子 [<sub>AgrP</sub> [<sub>AP</sub> 美し] Agr] い<sub>Pred</sub>]

イ形容詞文にコンピュータはないので、丁寧の助動詞として使われるのは(79)のAgr+Mod+Addrである。しかしながら、これを分割せずにAgr位置に外的併合すると派生が破綻する。(85)で、否定辞「ない」は形態的に形容詞であるため(助)動詞的要素の移動を阻止するとした。これと同じ理由により、イ形容詞のPredはAgr位置からMod+Addrが移動することを阻止する。すなわち、イ形容詞文においては複合体をAgrとMod+Addrに分割して統語計算に導入することが唯一可能な派生となる。

<sup>8</sup> AgrPが述語の2つの投射の間にあるという考えは新奇なものではなく、Koizumi (1993) や Lasnik (2001) などにもみられる。

(92)	A	Agr	Pred	T	Mod	Addr
	美し	Agr	い	∅ <sub>現在</sub>	Mod+Addr	Addr
		↓			↓	↗
		“∅”			“des” (> desu)	

こうして、イ形容詞文では「美しいです」「美しかったです」のようにつねにモーダル「です」が使われることが帰結する。

10.3節の議論をまとめる。現代標準日本語の辞書には2種類の丁寧の助動詞が登録されている。

- (93) a. Agr+Mod+Addr  
 b. Cop+Mod+Addr

非コピュラ文では(93a)を使用し、コピュラ文では(93b)を使用する。これらの複合体は1まとまりのまま統語計算に導入することもできるし、Agr/CopとMod+Addrに分割して導入することもできる。分割するとモーダル「です」が現れるが、分割しないほうが計算コストが小さい。分割するオプションがとれるのは複合体の移動を阻止する否定辞「ない」があるときのみである。よって、動詞文とコピュラ文では「ない」があるときだけモーダル「です」が現れる。一方、イ形容詞の要素であるPredはAgrの上にあってAgr位置からの移動を阻止する。ゆえに、イ形容詞文においては(93a)の複合体を分割するオプションが義務的となり、つねにモーダル「です」が使われる。

#### 10.4 コピュラ「ござる」とモーダル「ござる」の使い分け

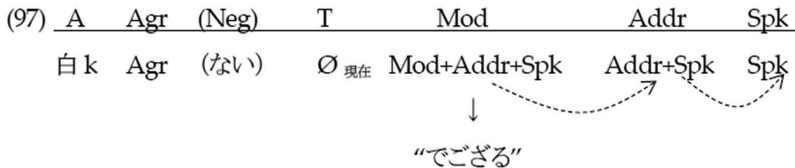
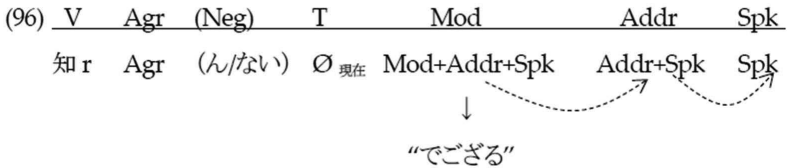
以上の議論をふまえてハットリくんの「ござる」の用法を説明する。9節で、動詞文の「ござる」は次の性質があることをみた。

- (94) a. モーダルの位置を占める  
 b. 『旧』の「ござる」は丁寧の意味ももつ  
 c. 話し手のキャラ(「私は忍者」)を表示する

(94a) より, 「ござる」はModであると考え。 (94b) より, 『旧』の「ござる」は「ます」や「です」と同じくAddrでもあると考え。『新』の「ござる」については不明であるが, とりあえずAddr範疇をもつとする(もたないとしても以下の議論は変わらない)。 (94c) より, 「ござる」は話し手位置にかかわる範疇でもあると考え, それをSpk (=Speaker) と表す。つまり, 「ござる」は次の3つの範疇からなる複合体として辞書に登録されている。

(95) Mod +Addr +Spk

動詞文やイ形容詞文, つまり非コピュラ文の派生は次のようになる。



(95) の複合体はまずMod位置に外的併合され, そこからAddrとSpkとしての選択特性を満たすために非顕在的に移動する。発音の対象となるのはMod位置の複合体であるが, これが「でござる」と出力される。なお, (95) にはAgrが含まれない。Agrは異なる語彙要素として統語計算に入り, 音形ゼロで出力

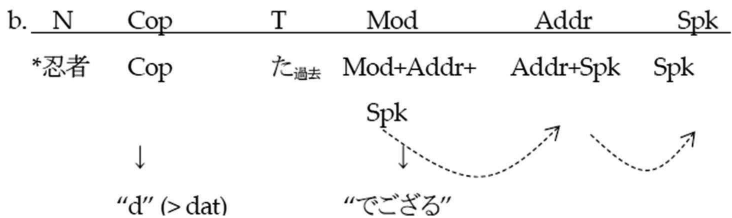
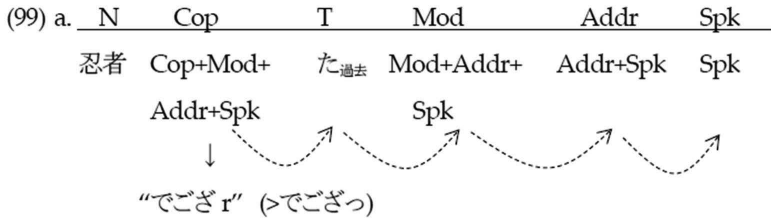
される。

非コンピュータ文ではこれ以外の派生可能性はない。よって、つねにモーダル「ござる」が使われる。

コンピュータ「ござる」は、(95)にCopも加えた複合体として辞書に登録されている。

(98) Cop+Mod+Addr+Spk

これは1まとまりで統語計算に導入することもできるし、CopとMod+Addr+Spkに分割してから導入することもできるとしよう。それぞれの場合の派生を(99a)と(99b)に示す。音韻部門での音声出力規則は(100)のとおりとする。



- (100) a. Cop+Mod+Addr+Spk → *degozar*  
 b. Cop → *d*  
 c. Mod+Addr+Spk → *degozaru*



(99a) からは「忍者でござった」ができ、(99b) からは「忍者だっただござる」ができる。ただし、複合体を分割すると計算コストが高くなるので後者のオプションは使用できない。

否定辞「ん[ぬ]」を使ったコピュラ文の場合も同様である。「ん」は主要部移動をブロックしないので、Cop+Mod+Addr+Spkを分割しないオプションを選択せねばならない。その結果、コピュラ「ござる」が現れて「忍者でござらん」のような文ができる。

一方、否定辞「ない」は主要部移動をブロックするので、この場合は複合体を Cop と Mod+ Addr+Spk に分割するオプションがとられる。

(101)	N	Cop	Neg	T	Mod	Addr	Spk
a.	*忍者	Cop+Mod+ Addr+Spk	ない	∅ 現在	(ModP, AddrP, SpkP を つくれず破綻)		
b.	忍者	Cop	ない	∅ 現在	Mod+Add+ Spk	Addr +Spk	Spk
		↓			↓		
		“d” (>de)			“でござる”		

否定辞「ない」があるときはしたがって、「忍者で(は)ないでござる」のようにモーダル「ござる」が現れる。

まとめると、コピュラ文でコピュラ「でござる」の使用が優先される事実は、コピュラが複数の範疇からなる複合体であり、2つの出力形をもつと考えることで説明できる。複合体は必要がないかぎり分割しないほうがよい。その結果、「忍者でござらん」のようにコピュラ「ござる」を使用することが無標となる。ただし、否定辞「ない」があるときには複合体を分割する必要がある。その結果、「忍者で(は)ないでござる」のようにモーダル「ござる」が現れる。

## 11. 結論

本稿は、「記述編」での観察からもちあがった次の3つの疑問に答えるべく議論をおこなった。

(102) (=55))

- a. 新用法の「ござる」の統語的ステータスは何か？
- b. 新用法の「ござる」の使用がコンピュータ文で制約されるのはなぜか？
- c. ハットリくんの発話が『新』になってピジン化したのはなぜか？

まず、新用法「ござる」はモーダルの位置を占めると主張した。ただし、意味的にはモーダルではない。「私は忍者」という話し手のキャラを表示するのがこの「ござる」のおもな機能である。『旧』にはこれに加えて丁寧の意味もあったが、『新』ではその意味が消えてしまっている。

つぎに、ハットリくんの発話のピジン化について議論し、新用法「ござる」が統語的にモーダル位置を占めること、および話し手のキャラ表示機能をもつことの両方がピジン化を招いたと主張した。「ござる」が純粋なキャラ語尾になると使用圧力が増し、どんな文でも「ござる」が使われるようになる。しかし、モーダルは他のモーダルと共起できない。結果として『新』のハットリくんはモダリティの使い分けができなくなり、発話がピジンのようになったのである。

最後に、コンピュータ文においてモーダル「ござる」の使用が制約されるのはなぜかを議論し、現代日本語の丁寧な断定のモーダル「です」の使用制限と同じ説明ができることを示した。コンピュータ文の「ござる」はCop+Mod+Addr+Spkという4つの範疇からなる複合体である。これを分割せずに使用するとコンピュータ「でござる」が出力され、CopとMod+Addr+Spkに分割して使用するとそれぞれコンピュータ「で」とモーダル「でござる」が出力される。語彙要素を分割する派生はコストが高いため使用できないが、否定辞「ない」があるときはそれが唯一収束可能な派生となるため使用できる。よって、否定辞「ない」があるときにかぎってモーダル「でござる」が現れる。

### 一次文献

浅田次郎『椿山課長の七日間』, 朝日新聞社kindle版, 2002年.

藤子不二雄<sup>Ⓐ</sup>『忍者ハットリくん (藤子不二雄<sup>Ⓐ</sup>デジタルセレクション)』, 全4巻, 小学館

kindle版, 2003年.

藤子不二雄<sup>Ⓐ</sup>『新忍者ハットリくん (藤子不二雄<sup>Ⓐ</sup>デジタルセレクション)』, 全8巻, 小学館kindle版, 2004年.

大倉崇裕『小鳥を愛した容疑者 警視庁いきもの係』, 講談社kindle版, 2012年.

さくらももこ『ちびまる子ちゃん』, 2巻, 集英社kindle版, 2013年.

## 参考文献

Baker, Mark C. (2003) *Lexical categories*. Cambridge: Cambridge University Press.

Chomsky, Noam (1995) *The minimalist program*. Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, Noam (2021) Minimalism: Where are we now, and where can we hope to go. 『言語研究』 160: 1-41.

Collins, Chris (1997) *Local economy*. Cambridge, MA: MIT Press.

Halle, Morris and Alec Marantz (1993) Distributed Morphology and the pieces of inflection. Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser (eds.) *The view from Building 20: Essays in linguistics in honor of Sylvain Bromberger*, 111-176. Cambridge, MA: MIT Press.

長谷川信子 (編) (2007) 『日本語の主文現象』東京: ひつじ書房.

Johnson, Kyle (2012) Towards deriving differences in how *wh* movement and QR are pronounced. *Lingua* 122: 529-533.

Koizumi, Masatoshi (1993) Object agreement phrases and the split VP hypothesis. In *MIT working papers in linguistics* 18, 99-148. Cambridge, MA: MIT Press.

影山太郎 (2021) 『点と線の言語学: 言語類型から見た日本語の本質』東京: くろしお出版.

Lasnik, Howard (2001) A note on the EPP. *Linguistic Inquiry* 32: 356-362.

南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』東京: 大修館.

Miyagawa, Shigeru (2022) *Syntax in the treetops*. Cambridge, MA: MIT Press.

日本語記述文法研究会 (編) (2003) 『現代日本語文法4 第8部モダリティ』東京: くろしお出版.

日本語記述文法研究会 (編) (2007) 『現代日本語文法3 第5部アスペクト, 第6部テンス, 第7部肯否』東京: くろしお出版.

Nishiyama, Kunio (1999) Adjectives and the copulas in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 8: 183-222.

仁田義雄 (1999) 『日本語のモダリティと人称 (第2版)』東京: ひつじ書房.

奥津敬一郎 (1978) 『「ボクハウナギダ」の文法』東京: くろしお出版.

Roberts, Ian (1991) Excorporation and minimality. *Linguistic Inquiry* 22: 209-218.

Saito, Mamoru (2015) Cartography and selection: Case studies in Japanese. Ur Shlonsky (ed.) *Beyond functional sequence*, 255-274. Oxford: Oxford University Press.

田中章夫 (1998) 「標準語法の性格」『日本語科学』4: 53-73.

上田由紀子 (2007) 「日本語のモダリティの統語構造と人称制限」長谷川 (編), 261-294.

Yamada, Akitaka (2019) *The syntax, semantics and pragmatics of Japanese addressee-honorific expressions*. Doctoral dissertation, Georgetown University.

Yamada, Akitaka (2023) Looking for default vocabulary insertion rules: Diachronic morphosyntax of the Japanese addressee-honorification system. *Glossa* 8 (1) : 1-47.